

## 高等学校における3年間を見通した特別活動の展開

——自主活動を中心に据えた活力ある集団づくりの試み——

2000年度高校入学生担任団

西本 眞・西原 利典・井上 芳文  
内海 良一・大隈 教臣・由利 直子

「生徒自身の手で自律した体育祭を創る」……2002年2月2日付けで高校体育祭運営局から提示されたコンセプトである。それより遡ること4ヶ月前の2001年11月、高校生徒会執行部から2002年度「学校祭」基本方針(案)が提出された。その冒頭に次のように謳ってある。「学校祭(文化祭・体育祭)は、本校の伝統的校風である自由・自主・自律の精神を発現する場であり……(中略)……主体的な学習の場である。(後略)」

生徒たちの中には学校行事を「学びの場」として捉え、それを「自律的に」運営していこうという意識がある。これは今に始まったことではなく、長年本校で培われてきた精神である。ではそれを支える教職員側の意識・態勢はどうであったのか。

本稿は2000年度入学生を受け持った6人の担任団がどの場面で何を学ばせようと意図して「学びの場」としての行事を仕掛けていったのか、その実践の記録である。

### I はじめに

高校3年間は短い。その3年間にたくさんの生徒会行事が組まれている。本校の教育方針として、教員があまり前面に立って行事の運営を指図しない、生徒自身の手で運営するという姿勢が重んじられてきた。その姿勢は先輩から後輩へ自然に受け継がれ、2005年に創立100年を迎える長い歴史の中で「自由・自主・自律」の校風が培われてきた。自然に受け継がれてきたとはいえ、そこには生徒にも教員にも確固たる理想と理念があり、それを守り続けようという意志が働いていたはずである。

しかしながら昨今その校風は、生徒側には「勝手気まま」と勘違いされ、教師側を「生徒任せ」に陥らせている感がある。

学校という集団社会の中で「自由」というのは素晴らしい権利であり、それを「自主的・自律的」に守らなければすぐにでも崩れ去ってしまう性質のものである。

平和で民主的な社会は与えられるのではなく自らの手で築くものであり、守り続けるためには努力を要するものであるという認識を生徒たちに持たせた。その思いが一致したところから2000年度入学生担任団(以下、担任団)はスタートした。

その具体的手段、方策として、生徒会行事を今一

度見つめ直させ、自分たちの手で運営するということの意義を確認させた上で、3年間を見通した計画的な活動を展開させることを構想した。

### II 担任団の編成

本校は1学年5クラスある。長年にわたり1クラス1名の担任で受け持ち、副担任は配属されていなかった。基本的に高校HR担任団5名は3年間変わることなく持ち上がる態勢を敷いていた。

1990年度から多くの教員がHR担任をすることができるよう、高Iから高IIになる段階で担任団を総入れ替えする制度が導入され、以後8年間続いた。

諸般の事情から1999年度より再び以前の制度に戻され、更に学年に1名ずつ副担任を置くという態勢になった。つまり高校1学年につき6名の正副担任団で受け持ち、入学から卒業まで3年間その構成メンバーは基本的には替わらない。

担任団の構成員は他の分掌と同時に前年度の3月中旬に編成され、発令される。構成は学校運営全体のバランスを考慮しながら、年齢構成・教科・分掌等偏らないように配慮されるが、必ず「進路指導部」と「生徒部」に所属する教員がメンバーに入る。「生徒部」は生徒の自主活動を支援する分掌として、その果たす役割は大である。

2000年度入学生を受け持つ担任団は通例通り、前年度3月中旬に構成され発令された。そして生徒部に所属する教員が副担任に位置づけられたのである。副担任制度が導入されまだ日は浅く、副担任の学年における役割・位置づけが確立されていたわけではないが、結果的にこの副担任＝生徒部という構図は生徒の自主活動を指導援助する上で非常に有効であった。

### Ⅲ 学年基本方針

2000年4月4日の最初の学年会において、この学年の生徒をどんな生徒に育てたいのかという基本理念を担任団6人で検討した。その結果、学校という集団・社会の中で自分もちろん大切にでき、同時に他人のことを思いやれる優しさを持った生徒に育てたいという思いが一致した。そして次のような学年目標を掲げるようになった。

「一人ひとり、みんなが学校生活を楽しむために、何ができるか考えよう！」

そして、入学式後担任紹介で講堂に残った新入生・保護者に向かって、学年主任がこの学年目標を確認したのである。この学年の集団作りはここから始まったと言えよう。

この目標からさらに高校Ⅱ年次は「集団としてどう育てていくか」という視点から学年の指導目標を以下のように掲げた。

「自主活動を中心に据えた活力のある集団づくり」

この目標に照らし合わせながら、文化祭・修学旅行・生徒会活動など高Ⅱが中心となる学校教育活動を展開していった。もちろん理想とする集団づくりの根底に、人権教育を据えていることは言うまでもない。

そして高Ⅲが核になり運営する体育祭をそれまでの集団づくりの集大成として位置づけたのである。

### Ⅳ 3年間の指導計画

生徒が活動する主な学校行事・生徒会行事は次の通りである。

- 4月 学年遠足
- 5月 春季クラスマッチ（2002年度より廃止）
- 6月 文化祭
- 9月 体育祭・修学旅行（高Ⅱ）
- 10月 秋季クラスマッチ
- 1月 カルタ大会

その行事ひとつひとつが単発で扱われ、相互の関連性なく行われるのであれば、やりっ放し・行事消化に陥ってしまう。行事を吟味・精選する一方で、

ひとつひとつの行事を線で繋ぎそれを3年間（あるいは6年間）というタームで捉え跳める作業が不可欠である。

「体育祭」を例にとれば、体育祭当日だけを取り上げて成否を評価するのではなく、企画・運営の核になる組織づくりから実行後の総括までを通してやりきる力をどう付けていくかが問われるべきではないか。それが年間、あるいは3年間の行事を「学びの場」として積み重ねていく中で運営力・実行力を培うことができるのではないか。「活動あって指導支援なし」では学校教育とは言い難い。

そこで担任団はこの学年集団の3年間で以下のような観点から大きく次のように区分して捉えた。

- 1 観察期 高Ⅰ前期
- 2 構想期 高Ⅰ後期
- 3 実働期Ⅰ 高Ⅱ前期（主として文化祭運営）
- 4 実働期Ⅱ 高Ⅱ後期（主として生徒会活動）
- 5 実働期Ⅲ 高Ⅲ前期（主として体育祭運営）

### Ⅴ 研究実践

#### 1 観察期（高Ⅰ前期）

##### (1) 学年遠足

入学して最初の学年行事が「遠足」である。その目的は「新しい学年やクラスの中で親睦を深め、楽しく学校生活を送るための仲間づくりを行う」ことにあり、集団で動く、あるいは集団を動かす組織作りとしての最初の一步と位置付けた。

以下はその実施要項である。

#### 2000年度 高Ⅰ遠足実施要項

目的 新しい学年やクラスの中で親睦を深め、楽しく学校生活を送るための仲間づくりを行う。

期 日 2000年4月27日（木）雨天決行

目的 地 県立もみの木森林公園

自主活動 アウトドアクッキング

- ・一班（10人）にかまど一基、薪一束。
- ・家庭用のバーベキューセットを持ち込んでよい。
- ・メニューは自由。（事前に計画書を提出。）
- ・食器、飯ごう、鍋など各班で準備。（現地で借りることもできるが、すべて有料。）

雨天時 現地に体育館があり、そこでレクリエーションを行う。

組織作りとして、各クラス一班10人の4班を編制し、当日調理するメニューの献立から予算立て、買い出し、調理計画、収支決算、反省までを取り組ま

せた。

後日書かせた感想の中で、役割・組織を意識したものをいくつか紹介する。

河野：雨が降って寒かったけど、みんなと共同作業をするのが楽しかった。

上岡：バーベキューはおいしかったし、友達と協力したのが楽しかった。

中村：学校では見ることの出来ない友達の意外な一面が見れて良かったです。

長尾：みんなで協力しておいしくできて良かった。ちょっと寒かった。

尾川：寒かったけど協力できてよかった。微妙な味。

城仙：彼らのナイスな一面を見せていただいた。煙で涙ばかり流れた。

加川：協力できておいしくて良かった。

## (2) 春季クラスマッチ

5月下旬に予定されていた春季クラスマッチは残念ながら雨天のため、当日の朝雨天中止が決定した。運営主体として生徒会執行部と体育委員がその準備に当たり、1年生の体育委員も当日の朝までグランドコンディションづくりに尽力していた。

その活動を徒労に終わらせないために、学年として体育の授業を急遽LHRに変更し、合同アセンブリーを実施。行事を企画・運営する側の大切さを説いた。

## (3) 文化祭

6月の文化祭では「仲間づくり」を柱に据えて取り組んだ。事前指導は以下のとおりである。

日時：2000年6月7日（水）第6限

場所：講堂

形態：学年一斉

概要：本年度文化祭へ向けての投げかけ

学校としてのテーマは「INNOVATION（イノベーション）」であったが、同時に学年として「人にやさしく」を活動全般における統一テーマに掲げて取り組ませた。

ちなみに各クラスサークルの内容は、1組「フォークダンス」、2組「リサイクルショップ」、3組「日本の祭り」、4組「世界の衣装」、5組「バリアフリー」であった。

事後指導ではクラス総括・個人総括をさせた。

日時：2000年6月28日（水）第6限

場所：各HR教室

形態：各クラス担任による

概要：①本年度文化祭クラス総括。

②文化祭の取り組みを通して、どれだけ「人にやさしく」できたか自己点検。

文化祭運営について、来年は自分たちが運営局の中心になることを自覚させ、文化祭運営全般についての意見・疑問・改善点を考えさせた。

## (4) 体育祭

本校の中学高校約1000人の全生徒が一同に関わる最大の行事が体育祭である。もちろん文化祭も中高同時開催であるが、同じ日にやっているというだけで、内容の一貫性は乏しい。

その一大イベントである体育祭を中心となって運営するのは高Ⅲ生である。

高Ⅰはまだ企画・運営という立場に加わるには日が浅すぎ、まして高校から入学した生徒にとってはどのようなものかすらつかめない。

よって一年次はどちらかと言えば受け身にならざるを得ない面があり、体育祭とはどのようなものか参加しながらじっくり観察する時期といえるであろう。

## 2 構想期（高Ⅰ後期）

### (1) 「学校を考える会」立ち上げ

この3年間の教育活動の中で、もっとも芯になる仕掛けが「学校を考える会」の立ち上げである。

その実施経過を記す。

2000年9月20日 高Ⅰ学年会

附属の明日を考える検討会議（仮称）

#### ◎主旨

校内の諸問題について自主的・主体的に取り組ませるために、生徒自身に考えさせ意識付けをする。

#### ◎内容

検討課題を以下の5つのテーマに分ける。

①生徒会の在り方（機構、規約、校則など）

②クラスマッチの在り方（時期、運営、クラスTシャツなど）

③文化祭の在り方（時期、運営、内容、中学校との連携、など）

④修学旅行の在り方（コース、研修内容、旅程、費用など）

⑤体育祭の在り方（運営、パート活動、内容、中学校との連携、など）

#### ◎方法

①高Ⅰ担任5名がそれぞれ一人一つずつテーマを担当する。

②生徒はクラスの枠を越えて、関心のあるテーマ

を選ぶ。その際、人数調整はしない。

- ③ HRの時間を数時間使って、各テーマごとにどうあるべきか考えさせる。
- ④ 毎時間検討された内容を一覧にして、教員間・生徒間の情報交換を行う。

◎計画

2学期, 3学期 全5~6時間

- 第1時 9月27日(水) 6限  
学年全体への投げかけ・説明(1研)
- 第2時 11月15日(水) 6限  
テーマ別 分科会
- 第3時 11月29日(水) 6限  
テーマ別 分科会
- 第4時以降 3学期

2000年10月2日 高I臨時学年会

学年LHR「学校を考える」について

- 1. 呼称「学校を考える」
- 2. 希望調査集計結果
  - (1) 部会別・クラス別希望者数(省略)
  - (2) 生徒会執行部希望者一覧  
(○の数字はクラス)
  - 執行委員長  
泉 裕作② 垂水裕三④ 宇根隼人⑤
  - 執行副委員長  
泉 裕作② 尾川由美子② 吉岡志野②  
今林景子③ 松田尚子③ 斎藤堅治朗④
  - 会計局長  
松浦拓也① 泉 裕作② 岩本泰史③  
日名孝之③ 河内沙絵④ 上木慎一郎⑤
  - 文化祭運営局長  
森信秀一郎① 中川裕梨①  
斎藤堅治朗④ 山田 育④ 河内沙絵④
  - 体育祭運営局長  
森信秀一郎① 中川裕梨① 泉 裕作②  
斎藤堅治朗④ 河内沙絵④ 瀨内希実子⑤
  - その他  
体育祭副運営局長 藤井澄恵①  
外交局長 新谷枝里子① 十時 淳②  
広報局長 石田 充③  
体育祭副団長 今林景子③

3. 人数調整原案

- A 1. 生徒会+3. 文化祭=24名  
+ 執行部参画希望者
- B 2. クラスマッチ 41名
- C 4. 修学旅行 73名
- D 5. 体育祭 47名  
※各部会若干の増減あり

4. 教員割り当て

- A 1名(西本) B 1名(大隈)
- C 2名(井上)(内海)
- D 1名(西原)

5. 10月4日(水) 6限 LHRの進め方(案)

- 14:20~ 第1研修室で全体に対し、本時の流れを説明する。(西原)
- 14:25 各部会の教室に移動。  
A(第1研修室) B(第3研修室)  
C(第1研修室) D(第4研修室)
- 14:30 各部会ごとに内容説明。  
(項目6. 参照)
- 14:50 部会最終決定。教室移動。
- 15:00 名簿記入。解散。

6. 各部会検討・活動内容(案)

- A(生徒会, 文化祭)
  - 案1 生徒手帳を徹底的に読む!  
・問題点, 改善すべき点, 不合理・矛盾を洗い出す。
  - 案2 文化祭が来年度6月に実施されることを前提に, 模擬実行局をつくり, 運営についてシミュレーションゲームをする。  
・仮に執行委員長, 執行副委員長, 文化祭運営局長, 企画, 会場, 装飾, ステージ, 受付・接待, 放送各局, 等々の役割を演じながら, 運営スタイルを検討する。
- B(クラスマッチ)
  - 案1 今年度, 秋のクラスマッチの運営に携わる。  
・その中で問題点を見だし, どう改善すればよいか検討する。
  - 案2 来年度のクラスTシャツの原案をデザインする。  
・これはあくまでも二次的なものだが, いざその時になって焦って作らなくても良いように, あらかじめ準備する。
- C(修学旅行)
  - 案1 来年度の修学旅行を企画する。  
・コース, 日程, 研修内容, 費用, 等々の検討など, 実質的な修学旅行準備委員会として機能させる。
  - 案2 ガイドブック「ぶるる北海道」をつくる。  
・人数が多いため, いくつかの小グループに分ける。それぞれがテーマを決めて調査・研究し, すべてのものを一冊にまとめる。印刷・製本までこの部会員で手が

け、学年・学校教職員に配布する。

#### D (体育祭)

##### 案1 今年の体育祭を振り返る。

- ・ I年生の眼から見て、今年の体育祭を総括する。

##### 案2 体育祭のあり方を考える。

- ・ 体育祭とはどうあるべきか、そのためにはどういう手順で組織作りをすればいいのか考える。

2002年2月28日

学校を考える会 体育祭部会

「2001年度 体育祭 基本方針」を考える

0. 体育祭に向けて組織をどう作り上げていくか
1. 体育祭はどうあるべきか
2. 競技の充実化について高Ⅱ学年会資料
3. 現在のパート活動に対する評価
4. 中学校との連携
5. 体育祭への参加態勢

その後、各部会の活動は随時継続的に行われ、それぞれの行事を運営する役員や生徒会執行部役員への具体的な動きへとつながっていった。

#### (2) カルタ大会

カルタ大会は第3学期、高Ⅲの授業打ち切り後に高Ⅰ・Ⅱ年だけで開催される行事である。大まかに言えば、各学年で予選を行った後、学年代表同士が決勝トーナメントを戦う。つまり、予選は学年内の運営になる。高Ⅰにとって運営を学ぶ格好の機会である。詳細は次に紹介するとおりである。

日時：2001年1月31日(水)

6限目 LHR と放課後

高Ⅰ・高Ⅱそれぞれの学年で予選を行い、学年代表4チームが決勝トーナメントに進出する。

この大会における予選運営を補佐した生徒部の由利は、その直後に発行された学年通信「テオリア」の中で企画・運営側の立場から次のように述べている。

「このカルタ大会は、新しい生徒会執行部が企画する最初の行事となりました。「みんなが楽しく学校生活を送れるように」という視点から、どのような企画を立てていけばよいかを考えていきました。

執行部のほとんどは2年生で、1年生は1人だけという状況です。1年生は体育館で、2年生は研修館でそれぞれ分かれて予選を行いました。

1年生の予選は1年生だけで運営しました。もちろん執行部の1人だけでは無理なので、各クラスから8人ずつ運営の補助員を募り、全体進行・計時・得点集計・審判員等々、裏方として大会を支えてもらいました。

200名もの人を動かす、これは大変なことです。人の動き・場所・雰囲気づくり・時間調整など、みんなの協力と全体を動かす的確な指示がなければ大会・行事は成立しません。そういった意味では、初めての経験に戸惑いながらも一生懸命、一人ひとりが自分の役割と責任を果たしてくれたことを高く評価し、「この子たちはやるな」と期待が持てる大会運営となりました。

期待すると欲が出て、ついもう一步上へと目標を高く掲げたくなるのが人情ですが、次のステップは多角的な視野での検討。やはり、一方向からの視点ではいろいろ見えない、気づかない落とし穴があるものです。言われて気づくのではなく、「みんなが楽しく学校生活を送れるように」という気持ちがあれば気づくべきことだったと思います。

来年度、この学年が文化祭をはじめ学校全体の行事を企画・運営していくことになりますが、全体のことが見え、同時に個々のことにも気を配れるリーダーの育成が不可欠であると思います。このリーダーは皆さん一人ひとりであり、そのリーダーを育て、支えていくのもまた皆さん自身です。そんなことを意識して動ける仲間づくりができたらと考えています。」

(学年通信「テオリア」2001.2.7発行号)

この学年をどのように育てたいかが、この言葉の中に集約されている。

#### (3) 文化祭運営局発足

体育祭を高Ⅲ生が運営するのに対し、文化祭は高Ⅱが運営の中心学年となる。かといって高Ⅱになってから企画組織を立ち上げたのでは、文化祭が開催される6月に間に合わない。

そこで例年、文化祭基本方針が前年度2学期に生徒会執行部より提案され、それを受けて3学期に高Ⅰの中から次年度の文化祭運営局長を選出し、運営局が組織される。

これまではクラス内、学年内だけの行事について運営してきたが、いよいよ学校行事運営に直接携わるわけである。運営局長はその核になるのだということ。「学校を考える会」の場を通して、学年全体に意識を持たせた。そして誰が運営局長になっても、

みんなが楽しく文化祭に参加できるように、周りから支えることのできる集団でありたいと投げ掛けた。

そして2001年度文化祭運営局長が2001年1月下旬に決定。運営局長は文化祭のコンセプトについて約1ヶ月半をかけて原案づくりの話し合いを、生徒会執行部ならびに窓口教員と持った。コンセプト作りを通して、行事全体をイメージさせ、その中で運営局長とはどのようなポジションなのかどう動けばいいのかを十分理解し、納得するまで考えさせた。この1ヶ月半がいわば運営局長研修期間、核の育成時期になったのである。

コンセプトが「みんなでひとつのものをつくる」になり、それを受けてテーマ「創・築・一」が決まった。そのテーマに沿った形で運営局の組織改革が行われた。

次にその各部局長の人選である。「学校を考える会」文化祭部会のメンバーを中心に人選し、局長自らひとり一人と話し合いを持ち、自分の文化祭に対する構想を伝え、そのためにどのような形で協力して欲しいかを訴えた。イエスマンばかりでは組織が活性しないからと、中には意見の対立する人間も組織に加えた。

2001年3月、2001年度文化祭運営局が発足した。

運営局長	森信秀一郎
会計局長	河内 沙絵
情報局長	竹中 由紀
サークル局長	城仙 剛史
プログラム部	久保 文香
クラスサークル部	米澤 旦
クラブサークル部	熊田 高志
オリジナルサークル部	石田 充

高I学年の一年間を振り返って、学年主任の西本は生徒にこう投げかけた。

「何事も教師主導で管理しないといけなくなっているのでしょうか。それでは「自由」という校風が廃れます。附属らしさが失われます。これらのことは全て生徒皆さんの自主性にかかっています。そして意識さえあればそれをやりきるだけの力量を持っていることを、この一年、ロッカーの上にもものを置かない状態が維持できたことが実証してくれました。

高IIでは更なる向上を期待しています。「充実した楽しい学校生活」をみんなが送れるように、友達や担任団とともに考え、ともに歩んでいきましょう。」

(学年通信「テオリア」2001.3.26発行号)

### 3 実働期I(高II前期)

高IIになり文化祭や修学旅行などいよいよ自主活動を実際に切り盛りする立場に立つ。高Iの後半から構想してきたことを具現するわけである。

本稿の冒頭でも述べたように、学年の3年を見通した目標は「自主活動を中心に据えた活力のある集団づくり」である。

その手段として「学校を考える会」を有効に活用していった。

2001年4月5日 高II学年会

こんな学年集団に育てたい

#### 自主活動を中心に据えた活力のある集団

##### 1. 切り込み口：「学校をよくする会」

##### 2. 方法論

- A. 生徒自身に問題点や課題を見つけさせる。
  - +面：生徒の自主性が重んじられ、主体性が育つ。
  - 面：実働するまでに時間がかかる。  
(ただ高Iの段階でお膳立てはできているようにも思える)
- B. 教員がある程度の道筋を設定し、投げかける。
  - +面：動き出すまでの時間がかからない。
  - 面：生徒の自主性が育たない。

##### 3. 理念

- (1) 誰もが一度は学年行事(学校行事)の運営に携わる機会・場の保障。  
集団を動かすにはどうすればいいのか、その苦しみと喜びを運営サイドに立つことで学ばせたい。
- (2) 集団の核(組織)づくり-議論する機会・場の保障。  
受け身ではなく主体的に課題を見つけ、解決策を練り出させたい。

##### 4. クラス役員の動きの意識付け

- A 生徒会機構にあるもの
  - 【4月の段階で前後期とも決めておく】
  - a 総代：(前後期各2名)4名  
従来の仕事に加え、生活指導委員とともにLHRの運営について原案をつくる。
  - b 生活指導委員：(前後期各2名)4名  
従来の仕事に加え、学校生活全般、特に「時間を守る」ことについて考える。
  - c 図書委員：(前後期各2名)4名  
従来の仕事に加え、進路係とともに学年独自の推薦図書を選定する。
  - d 保健委員：(前後期各2名)4名  
従来の仕事に加え、環境美化、特に「清掃」について考える。

- e 体育委員：(前後期各2名) 4名  
従来の仕事に加え、クラスマッチの運営に携わる。
- f 選挙管理委員：(通年1名) 1名  
従来の仕事に加え、生徒会組織・機構について考える。 小計21名

B 学年・クラス独自のもの

【4月13日くらいまでに決定】

- g 遠足企画係：4名程度  
遠足の企画・運営。
- (h 文化祭クラスサークル委員：1名  
文化祭クラスサークルの代表窓口。)
- 【4月中に決定】
- i アルバム係：2名程度  
卒業アルバムの構成について考え、写真を確保する。
- j 修学旅行係：6名程度  
修学旅行の企画・運営・準備の窓口。
- k 進路係：2名程度  
大学受験に関する情報収集、発信。
- l 体育祭運営局員：4名程度  
今年度の体育祭に運営局として参画しながら、体育祭の在り方について考える。 小計約20名

5. 「学校を考える会」の構成案

- ①生徒会部会
  - a 総代 (4名) b 生活指導委員 (4名)
  - f 選挙管理委員 (1名)
- ②文化祭部会
  - h 文化祭クラスサークル委員 (1名) 他7名
- ③修学旅行部会
  - j 修学旅行係 (6名) 他2名
- ④クラスマッチ部会
  - e 体育委員 (4名) 他4名
- ⑤体育祭部会
  - l 体育祭運営局員 (4名) 他4名

6. タイムスケジュール

4月10日(火)

学年オリエンテーションにて主旨説明。

[主旨]

誰もが最低一度は学年・学校行事の運営に携わり、集団を動かすことの難しさと達成感を味わおう。

学年オリエンテーションにて運営局長並びに局員紹介、意思表明

4月11日(水)

LHRにて企画係決定

LHRにてクラスサークル委員決定

4月12日(木) or 13日(金)

昼休みか放課後、遠足企画会議。

16日(月)

放課後執行委員会総会で活動方針案可決(予定)

18日(水)

LHRで企画についてのクラスワーク①

25日(水)

LHRで最終確認

26日(木) 遠足

新年度を迎えるに当たり、以上のことを学年会で確認して臨み、それを踏まえて子どもたちに担任団一人一人からメッセージを送った。

◆高校2年生になり、いよいよ学校の中心的存在となります。文化祭から始まり、やがて生徒会の中心的役割を担います。それは、学校の顔となることであり、自らが全体を引っ張って何事も率先して行動しなければなりません。(西本)

◆昨年はある面「客」。でも今年は「主」。主役・主人公・主人・主体・自主…やりたいことを見つけてどんどんやっていきましょう、楽しみながら。自分も楽しむつもりです。「やるべきことをいかに楽しむか」これが今年のスローガンではないでしょうか。(西原)

◆ゆったりとした、落ち着きのある雰囲気の中で友人と語り合うことのできる、居心地の良い学年になればいいなあ、と思っています。(井上)

◆七年間使い続けてきた一冊のノートがあります。時間に余裕があるときに理学部で行ったささやかな研究の記録です。改めて見返してみると、長年かけてたったのこれだけかと思う反面、少しは自分が成長したような気もします。今年もマイペースで行きます。でも一歩だけ階段を登ります。

(内海)

◆高2は人生を左右する大切な時期です。何事に対しても一生懸命になれる時期です。中途半端な事をしないで何かに徹底的に取り組んでもらいたいものです。部活、生徒会行事にまじめに取り組むことにより、精神の成長があるものです。嫌いなことから逃げずに正面からどんとぶつかって行きましょう。(大隈)

◆現在執行部の広報局長、石田君(2組)と文化祭運営局長、森信君(3組)をはじめとする7人の運営局員とともに、学校変革に悪戦苦闘しています。(でも「活き活きとして楽しそう」と言われます。)高IIのすごい点は、物事の洞察力にあると思います。一人ひとりのユニークな個性が理も

れることなく、それぞれが生きるポジションを与えられ、認められているように感じています。苦しいけど楽しい、やりがいのある学年だなと思っています。まずは今年度の文化祭で「あれっ!？」と感じる何か表現できたらと思っています。ご期待ください。(由利)

(学年通信「テオリア」2001.4.25発行号)

#### (1) 学年遠足

クラス替えが行われた高Ⅱの学年遠足は単にクラス内の親睦を深めることだけに留まらず、9月に行われる修学旅行を睨んで、200人の集団をどう統率するかを学ばせる機会と位置づけた。詳細は以下のとおりである。

#### 目的地の変更

2001年度は、「現地で学年全体の活動」ができ「みんなが楽しむ」ことができる場所に変更することを学年会で検討し、学校側の了解も得て以下のように決定した。遠足の行き先は生徒ら自身で考え、決めていくのが理想ではあるが、時期的にそれだけ検討する時間が十分取れない。場所については担任団側で決めたが、内容については生徒代表で企画し運営させた。

目的地 中央森林公園

日程案 2001年4月26日(木)

自主活動 クラスワーク

運営組織 遠足係

各クラス遠足係を4名選出。遠足までの2週間、放課後などの時間に集まり企画立案し、「みんなが楽しめる遠足」を運営していく。

2001年4月11日

高Ⅱ遠足第1回企画会議 議事録

15:15~16:00 於：数学教室

#### 1. スタッフ出席確認

- 1組 黒川朋子 重藤奈央 藤井澄恵  
三好瑠美子
- 2組 河野圭史 近末 聡 山下寛泰  
富永由莉子 久保田彩
- 3組 齋藤堅治朗 山王大介 井上貴統  
立田安礼 重川晋一 村上大輔
- 4組 橋真理子 保田麻友 横田道佳  
三上典子
- 5組 鳥羽倫太郎 浅海健太 中津井均  
金重真梨子 河内彩佳

男子12名 女子12名 全員出席

#### 2. 各クラス代表窓口選出

- 1組 黒川朋子 2組 山下寛泰  
3組 山王大介 4組 横田道佳  
5組 中津井均 (この5名が運営局を組織)

#### 3. 2.の中から座長選挙

(結果) 座長：中津井 副座長：黒川

#### 4. 検討事項

(ここから司会を座長・副座長と交代)

(1) 遠足の目的を「クラス内の交流」とする。

(2) 現地では前半はクラス単位で活動する。

(3) 現地での日程

10:00~12:00 クラスワーク

(内容は各クラスで18日のLHRにおいて決定)

12:00~13:00 昼食

13:00~14:30 自由時間

(クラスの枠を越えて自由にレクリエーション)

3組のバーベキュー以外は、どのクラスも芝生広場でスポーツレクリエーションとなった。

当日は天候にも恵まれ滞りなく計画通り実施された。

そしてついに「学校を考える会」の正式発足となる日を迎えた。

2001年5月16日 LHR

「学校を考える会」立ち上げ

#### 1. 全体の流れ

- 14:20 講堂入場完了
- 14:25~14:40 全体説明(西原),  
希望者概数把握・調整
- 14:40~14:45 移動
- 14:45~15:10 各部会

#### 2. 全体会の内容

- (1) 昨年度の活動を継続する。  
(生徒主体。教員は口を挟まない。)
- (2) メンバーは改めて再構成する。  
(本気で取り組むことを前提に。)
- (3) 基本的構成案(あくまでも原則。変更可。)
- A. 生徒会  
総代, 生活指導委員, 選挙管理委員
- B. 文化祭 文化祭クラスサークル委員
- C. 修学旅行 修学旅行係
- D. クラスマッチ 体育委員
- E. 体育祭

※実働する者がその部会を構成する方が動きやすいため。

#### 3. 各部会での討議内容

◎全部会とも出席者の確認。(名票による)



- A. 生徒会 次期執行部態勢について。
- B. 文化祭 各クラスサークルの情報交換、調整。
- C. 修学旅行 今後の活動計画立案。  
6/6 or 6/13 LHR で発表会？
- D. クラスマッチ メンバーの決定時期と方法  
検討。→すでに動きあり。
- E. 体育祭 2001年度基本方針、並びに体育祭原案について。

(2) 春季クラスマッチ

2001年度春季クラスマッチを振り返って

2001.5.30

◆◆運営について◆◆

- \* 執行部の人はもっとしゃきしゃきしてほしいと思った。だらだらだところちもヤル気なくす。
- \* お昼ご飯の時間を確保してほしい。
- \* 開会式から時間通りに集合できていない。多少強引でも中生徒会で実施している「遅刻したら減点」「審判が遅刻したクラスは減点」する方式を導入したらどうだろうか。
- \* 実行局の人のせいじゃないけど、時間がとても遅れて残念だった。
- \* あそこまでぬれてから中止にするんじゃないくて、中止するならもっと早くしてほしい。
- \* 当日小雨だったが決行した点は良いと思う。が、雷などの危険は感じられなかったのが、最後までやらせてほしい。
- \* 中途半端なクラスマッチをやるなら、最初からせん方がまし。濡れてしまったのなら、大雨になろうがどうだろうが一応やっている試合は続行するべき。
- \* 春季も延期するという話が1年の時の「附属を考える会」で出ていたはずなのに、そんな話がかけらも出てなかったのが、残念というか意味がないとかそんな気がした。
- \* チームのメンバー全員が平等に試合にでられるようにしていたし、クラスの他のチームが試合をしているときも応援に参加できた。

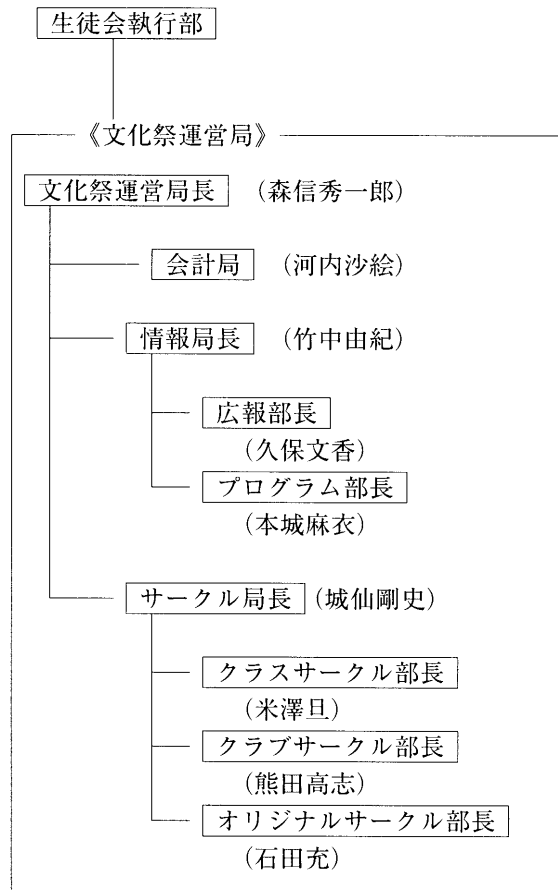
自分たちの学年が次期生徒会執行部役員になった時、これら運営面での課題をどう解決していくか、そこを意識させることが重要である。

(3) 文化祭

実際の運営や活動については紙幅に限りがあるため細かくは記載できないが、この学年が初めて学校全体行事を運営したその時の組織図は次に掲げたと

おりである。

《2001年度高校文化祭運営組織図》



その年の12月30日付けで運営局長から提出された400字詰め原稿用紙30枚分にのぼる量の「文化祭の反省」を取り上げ、「自己総括力・課題発見力」という観点で評価したい。

「2001年度 文化祭の反省」の項目は以下のとおりである。

- 1 文化祭ダイジェスト
  - ・今年文化祭の良かったところ
  - ・今年文化祭の失敗したところ
- 2 運営局組織について
  - ・サークル局長に関する反省
  - ・情報局長に関する反省
  - ・サークル3部長に関する反省
- 3 サークル活動について
  - ・「テーマとの整合性」は必要
  - ・時にはアドバイスも必要
  - ・サークル部長と責任者
- 4 金銭の扱いについて
  - ・これまでの金銭面での問題点

- ・今年の子な取り組み
  - ・反省点
  - 5 執行部との連携
    - ・これまでの執行部との連携
    - ・執行部の基本方針
    - ・執行部との棲み分け
  - 6 中学校との連携
    - ・中高の連携の限界
  - 7 PTA との連携
    - ・拡大する PTA 活動
  - 8 サークル大賞について
    - ・今年の子ークル大賞の特徴
    - ・「審査員制」の反省
    - ・もうひとつの子ークル大賞
    - ・何故2つの子ークル大賞が存在したか
  - 9 その他の色々
    - ・CM タイムはお天気次第
    - ・クラスサークル予算、5000円
    - ・有志バンド、黙殺
    - ・文化祭の理想の形-1.5日開催
- (添付資料) 文化祭終了後アンケート集計結果(略)

#### (4) 体育祭

高Ⅱ次の子育祭は、高Ⅰ次よりもさらに自分の問題として身近になる。なぜなら次年度、高Ⅲ次の子育祭で自分はどういう形で参加するかを睨みながら活動するからである。

そしてその年の体育祭が終了すると同時に、次年度に向けて生徒間での引き継ぎが行われ、次の体育祭が動き出してしまうのである。

この引き継ぎがその年の体育祭の総括がなされないうまま、学校側(教員側)より先に行われること、運営サイド、実行局サイドで行われるのでなく、組織としてはそれより下部にあたるパートごとに行われることがこれまで長年の課題であった。

そうすると生徒たちは前年度の反省課題を見いださないうまま、「個」の動きが先行してしまい、学校全体の行事としての学習も成長もないのである。

もっと学年全体・学校全体を見通した活動にしたいう。パート活動より体育祭全体の運営活動を優先させるべく、核になる部分の人選をしなければこれまでの反省は何も生かされない。担任団は次年度の子育祭にどのような姿勢で臨ませたいか検討し統一見解を持った。そのためにはどういう順序で組織を作るべきか、生徒会執行部役員の人選と合わせて、毎年生徒間での動きが起こる修学旅行までに、生徒に意識付けさせることにした。

#### (5) 修学旅行

修学旅行は文字通り「学習」を目的とする団体旅行である。この年の行き先は北海道、時期は9月下旬。「学校を考える会」修学旅行部会の子メンバーを中心に、修学旅行企画係を編成し準備にあたった。

主な活動内容は(1)全体のコース検討、並びにオプションコースの原案作り、(2)アイヌ民族差別問題現地学習会の資料作成、(3)しおりの作成、である。

これはこの年に限らず、毎年修学旅行前にどの学年でも取り組まれることである。ただ例年と異なるのは、他の行事を企画・運営するメンバーと重ならないということである。

わかりやすく言えば、往々にしてその学年内で自主的・主体的に活動しようとする人材は少数であり、彼ら彼女らが修学旅行に限らず、あれもこれもいろいろな行事の運営に携わりがちである。

「学校を考える会」設立の主旨は、誰もが最低一度は学年・学校行事の運営に携わる場を保障することによって、集団を動かすことの難しさと達成感を味わわせることにあった。従って、できるだけ同じ人間が複数の行事に携わらないよう配慮された点が例年の修学旅行委員編成と異なる点である。

#### 4 実働期Ⅱ(高Ⅱ後期)

##### (1) 生徒会執行部発足

修学旅行から帰った直後の10月3日に生徒会新執行部の選挙が行われた。前述したように学校全体を見通した活動にするためには、生徒会執行部役員と体育祭運営局員の人選はそのバランスを考えて行われなければならない。

修学旅行前の子年集会において、一年次から生徒会執行部役員を務めている生徒がそのことを訴え、修学旅行中がその準備期間となった。

そして以下のように新執行部体制が決まった。

執行委員長	保田麻友
副執行委員長	吉岡志野
会計局長	米澤 旦
監査局長	近末 聡
書記局長	上杉遥子
外交局長	澤井啓一郎
広報局長	石田 充

これと並行して体育祭運営局の人選も生徒の中で進められていたのである。

##### (2) 生徒会執行部の活動

例年生徒会の新執行部が決まると、年間を見通した活動計画を立てる。文字通り先を読んで活動する

ことになる。

本校の年間生徒会行事は次の通りである。

- 10月 新執行部組閣
- 11月 秋季クラスマッチ
- 12月 体育祭役員選挙（年度によって流動的）
- 1月 カルタ大会  
文化祭役員選挙（年度によって流動的）
- 3月 卒業記念機関誌「うごき」編集・発行
- 新年度
- 4月 新入生向け案内誌「附高入門」発行  
生徒会オリエンテーション  
クラブデモンストレーション
- 5月 生徒総会  
春季クラスマッチ（2002年度より廃止）
- 6月 文化祭
- 9月 体育祭
- 10月 新執行部発足への準備

この年の生徒会執行部はとにかく先を見通して今すべきことを見極めること、実施後は経過も含めて記録を残し、次世代に課題の引き継ぎをきちんとすることを主眼において取り組んだ。

以下はその引き継ぎ内容を記した文章である。

- ・ 執行委員長、副執行委員長は全ての責任を受け持つ役職と考え行動していかなければならない。一年間で自分たち執行部の方針を定め、引き継いでいくという大きな仕事を持っている。それは決して「知らなかった」で済まされる問題ではない。情報収集と資料確認には常に力を注いでいてもらいたい。一番上に立つ立場として全ての者への注意を払い、また信頼関係を築くことが必要である。責任感とは重く辛いものではあるが、それが必ず自分自身への力となることを信じ努力していてもらえれば幸いである。（執行委員長）
- ・ 現在附属の会計システムは大きな問題もなく動いています。このままでも十分機能するでしょう。ただ、様々な部分において細かな問題は存在しています。事務的に仕事をこなし、言われた事だけをやるのではなく、積極的に問題を発見し、解決しようとする志を持ち、僕が行ったことでも不相当だと思う事があればすぐにでも正してもらいたいと思います。常に客観的な視点から学校全体を見て、会計として何が出来るか、何をすべきかを判断できるようになってもらいたいと思います。（会計局長）
- ・ 全体を通して書記局の仕事は自分から自主的

に行う仕事ばかりです。限られた仕事の中で自分から新しいものを見つけ、動いていくことが先に求められます。（書記局長）

- ・ 生徒会とは全ての生徒が構成員であり、それらがばらばらでは組織として成り立ちません。組織の運営をスムーズに行うためにはそれぞれに意思の疎通が必要です。そして広報局はそのための局です。つまり広報局の仕事とは、たとえ一方的なものではあっても、生徒会と生徒の間でコミュニケーションをとる、ということです。生徒会員に伝えたいことを言葉にし、それを四角い紙の上に載せて伝えるのです。

（広報局長）

- ・ 監査局長に求められるのは、執行部全体の動きを客観的に見ることが出来、膨大な量の予算決算表に対して妥協せず、おかしな点がないか何度も確かめる根気、それぞれのクラブに耳を傾けられる友好性と裁定力、どんな場合にも揺るがない判断基準を持った人物です。

（監査局長）

### (3) 体育祭運営局発足

2001年12月、2002年度体育祭運営局長の公募があり、森信秀一郎が立候補し、信任投票の結果、高支持率で信任された。さっそく組織図づくり・活動方針原案づくりなど精力的に動き、運営各局の局長公募も進められ、会計局長に石田充、競技企画局長に松田瞳が決まった。

この3名がいわゆる「核」になるべきポジションになる。3名ともはじめからこの部署を希望していたわけではない。森信は「体育祭を成功させたい」という思いは強いものの、自分がどの位置でそれに携わるかを迷い続けていた。生徒会執行委員長、マスメガムパトリリーダーという選択肢も彼にはあった。どちらかと言えばパート活動が第一希望であった。どのポジションでも彼は力を十分発揮できたであろう。しかし彼は学年全体、学校全体を考えて運営局長として体育祭に関わることを選択した。

他の2名についても同様である。やりたいことは他にもあったのだが、自分の役割を客観的に捉え総合的に判断した結果、それぞれの役職に就いた。

もし、2002年度の体育祭は成功だったと評価されるなら、その要因はこの人選過程にあったといても過言ではなかろう。どの組織・集団でもそうであるが、各個人が自分の好きなこと・やりたいことだけをやって全体がうまく回ればそれに越したことはない。現実はそのはいかないもので、学年主任は「ゆるやかな個人主義」と表現したが、個を大切にで

きる集団であると同時に、集団全体のためにどこかで個が妥協・納得する必要もある。

卒業後、この苦渋の選択は必ずや生きてくると確信する。

2002年2月2日、体育祭運営局より「2002年度体育祭 活動方針原案」が提示され、基本コンセプトは「生徒自身の手で自律した体育祭を創る」、パート間あるいはパートと運営局間の連携が十分とれるよう、各局長および団長の役割をより明確にすることが確認された。

団長は運営サイドの一員であること、そして選手団を統括していくことが確認されたが、このことは数年前まで当たり前のこととして為されてきたことではあった。しかしながら、少しずつ曖昧になってきたこともあり、今一度原点に帰ろうとする動きが生徒の中で起こったのである。

もちろん3年間しか在籍しない高校生にとって、3年以上前の組織はわからない。そこには少なからずより良い形に是正しようとする教員の意志が働いたことは確かである。しかしそれは決して押しつけではなく、生徒とともに何をどう改善していくべきかを考える過程において、相互納得の上で合意した事項である。

この責任ある重要なポストに赤・白それぞれ一人ずつ名乗りをあげ、2月6日の選挙で両名とも9割以上の支持を得て信任された。

赤団長 上木慎一郎、白団長 瀧内希実子

この2名もまたパート活動を第一希望に持ちながら、悩み考え抜いた上で運営サイドとしての団長に立候補したのであった。

## 5 実働期Ⅲ（高Ⅲ前期）

高Ⅲになると体育祭色が自然と強くなる。しかし体育祭だけを過剰に意識させないよう、あるいは教員自身過剰反応しないよう留意した。

### (1) 学年内スポーツ大会

2002年度から完全週休2日制が実施になり、授業数確保の観点から行事が精選された。春季クラスマッチ廃止もそのひとつであり、楽しみにしていた高Ⅲ生有志は代替行事「学年内スポーツ大会」を自ら企画し、提出してきた。

2002年6月16日（日） 実施

#### ◎ 事前指導

- ・自分たちの手で企画から運営までやりたいという思いを活かす。
- ・学校学年行事にはならないので、あくまでも有志

として行うためのルール作りを行う。

- ・単なるレクリエーションではなく、「学習の場」として位置づける。
- ・休日に大勢の生徒が学校に出入りするため、警備上あらかじめ全教官及び事務室に連絡を入れる。

#### ◎ 結果

- ・当日までに実施要項を作成し、準備から後かたづけまでの計画を立てた。
- ・当日は晴天に恵まれ、予定通り実施した。

#### ◎ 反省・評価

- ・女子の参加人数により直前になって競技種目を変更したため、借用物品にモレがあり、当日体育科に迷惑をかけた。
- ・概ね時間を守りながら動くことができ、全体としてスムーズに運営できた。
- ・天気が良すぎて逆に怪我や日射病などが心配されたが、大きな怪我もなく無事終了した。
- ・グラウンド整備、清掃、下校など全員が意識を持って取り組んだ。
- ・明るく日の遅刻、欠席が懸念されたが、閉会式で釘を刺したこともあり SHR の出席状況は良好であったように見受けられる。

### (2) 文化祭

前述したように、高Ⅲになると体育祭へ傾倒し、文化祭を疎かにする傾向があった。文化祭も大切な学校行事であり、何よりも前年度は運営学年として運営サイドの苦しさを経験しているからこそ、2年生をフォローし、成功するように協力していかなければならないはずである。喉元過ぎれば、というような無責任な人間にはなってほしくなかった。

そんな心配もよそに、文化祭準備期間は体育祭準備活動を必要最小限まで停止し、文化祭への取り組みに励んだ。

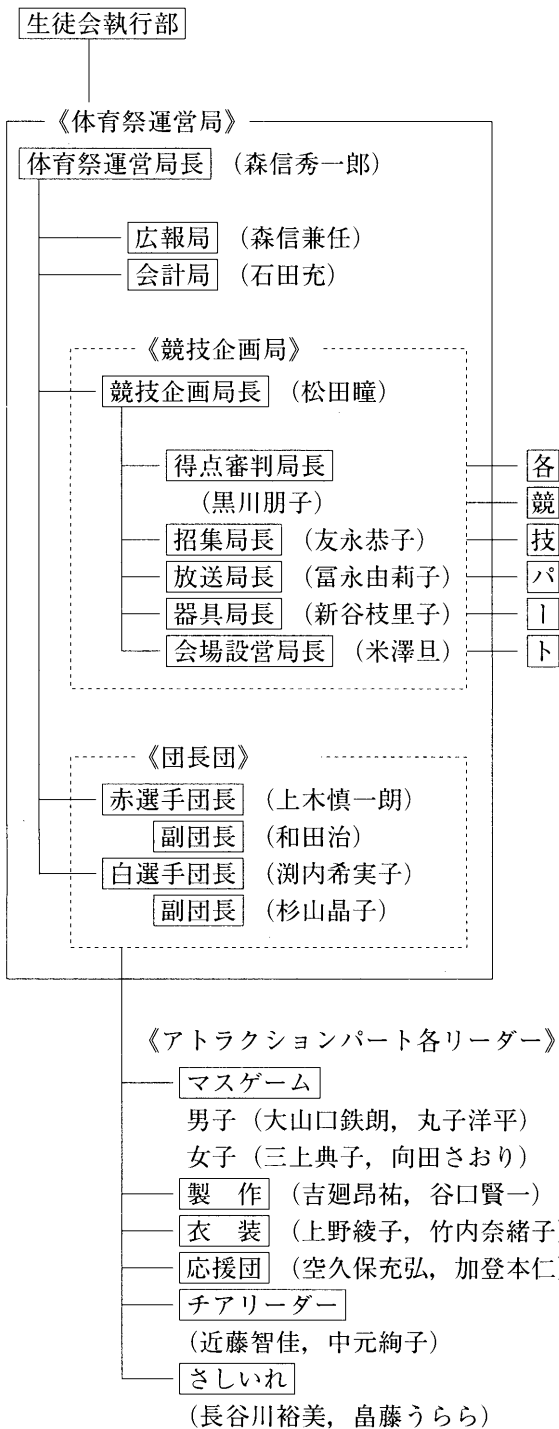
その結果、参加者が選ぶサークル大賞の数ある部門賞のほとんどを高Ⅲ生のサークルが受賞した。

すべての行事に一生懸命本気でぶつかり、それを楽しむことができる集団になりつつあることを確信した。

### (3) 体育祭

2002年度体育祭全体の取り組み経過については、生徒部室に保管されているファイルに詳細が記録されているのでここでは割愛し、最終的な運営集団の組織図（図1）を紹介するに留める。

《2002年度高校体育祭運営局組織図》(図1)



学年としては体育祭終了後、あまり時間をおかない内に全員に自己総括させた。項目は次の3点である。

- ◆あなたは今年度の体育祭にどのような思い、どのようなスタンスで臨みましたか。
- ◆実際にどう取り組みましたか。
- ◆体育祭を終え、最終的にどう自己評価しますか。

(自分の中で変化したこと、強まったこと、弱まったこと、得たもの、失ったもの、学んだこと、身に付いたこと等々)

つまり体育祭前と終えた後で個人としてどう変容したかを内省させたのである。

全部は紹介できないがいくつかピックアップして掲載する。

◆あなたは今年度の体育祭にどのような思い、どのようなスタンスで臨みましたか。

- ・ 最高学年として他学年への規範となるよう気をつけた。
- ・ 受験に響かないように、冷めた目で見れるように。
- ・ つかず離れず。客観的な立場から“体育祭が真に必要なかどうか”を見つめようと思っていた。
- ・ 大した意気込みもなく、何となく勉強の方に頭を向けながら。
- ・ 三年生として先輩に教わったものを後輩に伝える。

◆実際にどう取り組みましたか。

- ・ 人にいっぱい迷惑をかけてしまったけれど、仕事に関しては誠実にできたと思う。
- ・ アトラクションパートについては意図的に事務的・時間的な関係のみにとどめて、タイムテーブル、競技、進行に専念して仕事を見つけること、それをこなすことを続けた。
- ・ パートはもちろん、競技にも例年以上に意欲的に取り組んだ。
- ・ 体育祭をできるだけ優先させないように取り組んだ。
- ・ 他のパートとの連携を大切にしたり、何度もパートリーダーで会議をして、流れを確認した。競技を大切にしてもらうためにどうすればみんなが楽しめる競技になるか考えた。
- ・ どっぶりつかりこんでしまった。客観的どころではない。自分の意志の弱さを再確認したのみ。
- ・ パンプ部の部長として、パンプの原稿等に誤解を招くような語が使われていないか気を配った。
- ・ 自己満足で終わらせないようにした。後輩の悩みを聞いたり、精神的にしんどそうに見える子を注意して見るようにした。
- ・ 時間厳守を徹底させた。
- ・ やれることは精一杯やったが、勉学の面がおろそかになってしまったことを後悔している。

◆体育祭を終え、最終的にどう自己評価しますか。

- ・ 体育祭を通して得たことは、仲間を信じること。だけど時に意見が対立してしまった場合はお互いにとってプラスになるように話し合った。失ったものは勉強時間。
- ・ 色々苦勞したし、ツライこともあったけど、やり通そうという意志が強くなったと思う。少々のことではヘコたれなくなった。ツライ時には支えてくれて一緒にがんばってくれる仲間を得た。
- ・ どうすれば後輩とうまくやっていけるかということをよく学んだ。
- ・ 身に付いたことは良くも悪くも人にまかせること。自分で処理しきれないことは、適切に処理できる人にまかせることは必要なことだと思った。
- ・ 自分の中にある確固した何かを見つけることができたように思う。それはこれからの人生に待ち受ける様々な困難を乗り越えていくための自信にもなると思う。
- ・ 得たものはやっぱり友情。学んだことは人をやる気にさせる方法とか、多くの人をまとめてひっばっていく方法。それに伴って自分も少しは人間的に成長できたと思う。
- ・ 辛いことや苦しいことの大きな山を越えて、楽しさや感動があるということも改めて思い知らされた。
- ・ 今思えば無駄な時間を過ごしたとしか思えない。のめり込むことはなかったが、振り回されたため、もっとしっかり自分を優先させればよかった。学んだことは結局みんな流されるということ。
- ・ 友情が深まった。もの作りの精神とプライドを手に入れた。附属生としての誇りを得た。
- ・ 大きな集団を動かすことの難しさを改めて感じた。
- ・ 普通の高3生が受験勉強しているときに、自分たちはお互いのために協力し、助け合うことが出来た。そこから得た自信と感動は他人から見れば大したモノではないかもしれないが、自分にとっては大きな力となると思う。
- ・ 準備段階でいろいろ情報がきちんと流れてきて、「みんなで作り上げている」感がよかった。
- ・ 69人という集団で動き、ひとつの目標を達成させる難しさがわかった。しかし、がんばった分だけ終わった後の達成感と喜び、そして仲間達との絆は何物にも代え難い。

- ・ 規制がきびしい中で活動していく上で、一日の練習時間がたくさんの方の苦勞の上に成り立っていることや、ひとり一人の勝手な行動がたくさんの方の迷惑になることを知った。少ない練習時間を不満だったけど、それを知って練習できることをありがたく思うことができた。
- ・ 人の性格はそれぞれ違い、人と協力していくことの難しさをあらためて思い知った。いいものを作るためには我慢も必要だということも思い知ったが、ストレスがたまりすぎた気がする。自己中心的な人たちが意外に多いことを知った。私が親になったときは、あのような人たちみたいな性格の子どもには育てたくないと心に決めた。いい親になれるような気がする。
- ・ 活動するうちに自分の能力のなさにも気づくことができ、いろいろな人にそれを支えてもらった。いい仲間に恵まれたと思う。
- ・ 何か一つの事をがんばっていれば、必ずそれを見てくれている人や陰ながら応援してくれている人がいることを知り、これからの生活に勇気がわいた。それと時が経つのは早いので、今やることは今やるということ。

以上是个々の反省であるが、これとは別に生徒自身が自分たちの取り組み全体を運営という立場から振り返り、自己評価したのも残されてある。(生徒部所蔵) 記述項目は次の通りである。

- ①それぞれのパート運営について、成功したと思う点・失敗したと思う点を書いてください。
- ②他のパートの活動について、成功したと思う点・失敗したと思う点を書いてください。
- ③今年の体育祭運営について、成功したと思う点・失敗したと思う点を書いてください。
- ④1年間の活動を通して、赤 vs 白という2組対抗の現在の形式についての感想・意見を書いてください。
- ⑤同じく、赤白をクラスで分ける現在の形式についての感想・意見を書いてください。
- ⑥同じくパートに赤白の区別がある現在の形式についての感想・意見を書いてください。
- ⑦高3や、1・2年生をまとめる立場として、大変だったことや感想を書いてください。
- ⑧それぞれのパートの今後の課題と解決のヒントを来年の後輩のために書いてください。
- ⑨体育祭全体についての感想・意見などを自由に書いてください。

運営局と団長団、そしてパートリーダーらが書き

残したものであるが、そのB4の用紙一杯に小さな手書きの文字でびっしり書き込んである原稿を見ると、活動の苦しさ、それをやり遂げた喜び、そしてさらなる課題が生々しく浮かび上がってくる。その中で特徴的なものをいくつか挙げる。

- ・ 今年の体育祭はとても真面目で、甘かったように思う。何というか高校生らしくないというか。たしかに演技パートにいたたくさんの子が脱落した。あまりにたくさん脱落者を見て、体育祭も生徒の方から自滅してしまいそうな嫌な予感がした。弱体しているのは後輩だけではない。僕ら高3もかなり「弱く」なっている。指導が悪いとかじゃなくて、パートに残りたいと思わせるような「強さ」がなくなっているのかも。あまりに優しくしすぎたのかも。「附属の体育祭を潰さないでくれ」と言われた1年の頃。今の僕には同じ事を後輩に言う自信がない。得体の知れない嫌な予感、体育祭崩壊の時を、こんなにも強く感じているから。

(運営局長)

- ・ 今年の体育祭を見ていると、本当に体育祭がなくなるのではないかという危機感が強くなった。赤マスゲームのあの1、2年のやめた数にはびっくりしたし、チアとかの1、2年も大変だったらしい。一方で、人は確実に余っているという現実。パート参加自由化、パート赤白合同化という流れにもなっていくそうだけど、個人的にはこれには反対。というより今の体育祭を大きく変えようとする、絶対どこかで歪みがおきて、そして消滅しそうな気がする。マイナーチェンジで毎年少しずつ修正するしか良くなる方法はないと思う。そういう意味では今年、全員＝競技と団長団の動きは特筆すべき改善点であろう。来年の課題はたくさんあるけれど、前の年の良い所を土台に少しずつ改良する以外に道はない。(会場設営局長)
- ・ もっとパート活動全体の動きを見てまわるべきだった。パートリーダーからの情報だけでは全然足りないし、パートの雰囲気など自分の目で確かめておく必要があると思う。パートリーダーから言ってこない事もたくさんあるので、団長団の方からパートの様子を見て、パートリーダーに声をかけた方がいい。パートリーダーひとり一人ともっと仲良くなればよかった。

(選手団長)

- ・ どのパートにも言えることだと思うけど、体育祭に対するモチベーションが年々下がってき

ていて、自分たちの思うように後輩を指導できないことも多々ありました。今年の経験から私と言えることは、人間はみんな考え方が違うから、それをどこまで受け入れるかを指導者が決め、他の上級生達と話し合ってから方針を決めるべきだということです。

(チアリーダーパートリーダー)

- ・ 最初かなり悔っていた。どうにかなるだろうと思っていた。責任感が足りなかったのだろう。ひとり一人について真面目に考えることなどしなかった。だが初めてみんなの前に立ったとき、気付いた、気付かされた。ひとり一人が責任を持って、意志を持ってマスゲームをしようとしていたことに。そして僕はそれらの集団をまとめなければならないリーダーだということ。リーダーというのは甘い役職ではない。神経を尖らせてひとり一人を見つめてゆかなければならない。結局最後まで達成感はなかった。後悔している。欠員となった5人のことも僕がちゃんと理解できていたなら、もしかしたらマスゲームができたかもしれない。謝っても謝りきれない。何度も挫折しかけた。その度仲間がいてくれた。本当に大変だったのは僕より周りの3年生だったろう。ありがとう。後輩に伝えたいことは、自分の視野を広げていくこと。それが体育祭の出来を決める。ひとり一人の視野が広くなれば周りのことが見え、気遣うようになるし、自分の行動に抜かりがなくなる。最終的に自分がやらなければならないことも分かるようになるだろう。

(男子マスゲームパートリーダー)

## VI 成果と課題

この年の体育祭運営局14名はアカシア奨励賞<sup>(\*)</sup>を受賞した。受賞理由は「これまで体育祭運営の課題とされていた健康・人権・金銭・時間等様々な問題に取り組み、円滑で健全な体育祭運営を実行した」ことによる。

体育祭が現在のような形になって四半世紀。これまでも20数組の運営局が存在したことになる。これまでと今年度と何が違っていたのだろうか？

結論からいえば、ことさら違った点はない。もっと言えばこれまでではできて当たり前のことであり、何も取り立てて賞賛すべきことではない。

それが際だって特別なことに映ったとしたら、裏を返せばそれは今まで当たり前でできていたことが、当たり前ではなくなったことを意味するのではない

か。

確かに2002年度体育祭運営局は一枚岩となって、学校全体のことを視野に入れ活動を展開した。学年全体も集団組織の中で個々の役割を自覚し、行事全体のことを考えて行動できたと思う。

しかしそれが「学校を考える会」をはじめとする教員側の仕掛けによって誘導されたものであるとすれば、果たしてそれは真の意味での「自主・自律」であったのか。体育祭ばかりに話題が偏るが、準備段階から時間を守れ、人権を大切にせよ云々、と訴え続けたのは教員の側である。私たちは生徒の「自主性、自律性」を育てると言いながら、大人の言うことに従順な物言わぬ人間、無抵抗で小さくまとまった創造性のない人間に育ててしまったのではないのだろうか。

生徒の中にはそこまで見抜いた者もあった。彼は高校3年間の活動を振り返って「確かに高Iのときの「学校を考える会」等の投げかけがなければ、体育祭の成功をはじめとするこの学年集団の力は育たなかつただろう。しかし、今になって思えばあのとき先生たちにあそこまでお膳立てされなければならなかった自分たちの不甲斐なさを情けなく思う。」と懐述している。私たちはこんな生徒が育ってくれたことに喜びを覚え、誇りに思う。

権力を持って学校側の都合だけを押しつけたのではない。学校における特別活動としてここまでは譲れる、ここからは譲れないというその基準を明確に示してやり、その中で何ができるのかを考えさせてきたつもりである。

言い換えれば「筋が通らないことには断固反対するが、筋が通ることであればできる限り精一杯応援する」という教員側の姿勢を早い段階から示してやり、生徒との信頼関係が成立したところから教育活動は始まるといえるのではないか。

この度の取り組みを「総合的な学習」という観点で捉えてみた。

「学校を考える会」の目標を、(1) 学校生活における諸問題を自らの問題として考える態度の育成、(2) 集団活動の中で主体的、自主的に取り組む姿勢の養成、(3) 広報活動や活動をまとめる作業を通して、コミュニケーション能力の育成、と設定する。

そしてクラス行事、学校行事に意識を持って取り組み、その解決策を具現する場を保障し、失敗やつまづきも許容してやる。

その際なぜ失敗したのか、うまくいかなかった原因は何かを常に振り返り、次の課題を発見させる。これは「総合的な学習」にも共通する中身である。

しかし、「総合的な学習」が「個」の変化・成長・深化を評価する点、単年度で学習が完結する点、学習時間としてLHR以外の時間を使用しなければならない点、などを考えると、この度の私たちの取り組みは「総合的な学習」とは言えない。あくまでも「特別活動」である。

工夫次第では「総合的な学習」として発展させることができるかもしれないが、3年間という長期展望を持って学年集団をどう育てていくかという教育活動は教育課程に縛られるものでもないように思われる。

## Ⅶ おわりに

集団を動かすための組織運営を通して様々な体験ができ、その成果が有形無形に身につく。それらは一見世間で言う進路実現（いわゆる大学進学等）には無関係のように思われる。

その時点では一見受験には無意味で、互いに無関係に見える活動や経験も、ある時ふとした瞬間にそれぞれが線で繋がり体系化されると、それは大きな力となって発揮される。それが本校の生徒が卒業後に伸びると言われる所以ではないだろうか。しかしながらその力は決して目に見えたり、数値化できないので評価の対象にはならない。従ってこの学年の取り組みの成果を客観的に評価することはできない。

ただ「目に見える学力」のみを追い求めるが故にこういった「目に見えない学びの力」を培うことの大切さを見失ってはならないと思う。この学年での取り組みが、生徒の「目に見えない学びの力」を養ったであろうことを念じて止まない。

(※)

### アカシア奨励賞

本校の教育理念である「調和ある全人的教育」を推進するために、本校の象徴である「アカシア」を冠した奨励の賞を設けている。今回はその中で「特別教育活動部門」「団体」として表彰された。